

令和5年度 第1回窪田空穂記念館運営委員会 会議概要

- 1 日時 令和5年5月18日(木) 13時30分～15時
- 2 会場 窪田空穂記念館 会議室
- 3 出席者
 - (1) 赤羽英明委員、大澤秀夫委員、大下一真委員、折井理智子委員、窪田武夫委員、三枝浩樹委員、萩原良治委員、高野毅委員、三ツ井夏月委員 9名
 - (2) 市側
博物館長 加藤孝、課長補佐(事業担当係長) 山村里佳、庶務担当係長 竹内祥泰
窪田空穂記念館分館長 栗田正和、會田美保
- 4 正副委員長選出
委員長 大澤秀夫委員、副委員長 萩原良治委員
- 5 令和4年度事業報告
 - (1) 窪田空穂記念館の実績と評価について
記念館がここにあることの実績が示されたが、評価のポイントをどこにおくか。入館者数は549人増えているが、コロナが明けたからということなのか。これまでの30年の経緯の中で見るとどうなのか。何をもちて記念館の意義や内容を評価していくか。(委員長)
→空穂の生家がここにあるということから、生家は開放し、講座を開催。記念館は空穂の生涯、短歌の展示をし、来館していただくことで学習につながっている。去年はコロナが下火になったこともあり、来館者が増えたことはあるが、公民館との連携を進め、共同企画の写真展など、多くの皆様に来場いただいた。(分館長)
→来館者数が評価の一つの指針にはなるが、交流人口という言葉がある。これは来館者数のように日々の数字としてはまとまっていない。小中学校との交流、先生方の研修、こども教室、こどもの短歌の応募者やボランティアなど、多くの方が関わっている。通常の入館者以外の多様な人の関わり、人の動きの30年を入館者、投稿者、ボランティアなど数字で整理してみたい。すると、時代の動き、記念館の活動のありようが見えてくるのではないか。(委員長)
- 6 令和5年度事業計画
 - (1) 松本市立博物館(方針) 観覧料
松本市立博物館分館の一部の観覧料が無料というのは、空穂記念館が含まれるのか。(委員)

→空穂記念館も含まれる。(分館長)

→今年の秋から16分館の中で無料化、引き続き有料、また、値上げを検討している分館もある。博物館協議会にて協議、答申をいただいているが、市議会はこれから。市民や観光客への周知期間が必要なため、令和5年10月の博物館本館の開館に合わせての観覧料無料化や、月曜日であった休館日を本館の火曜日にあわせることは、現状、無理がある。分館全体として、周知期間をしっかりとるように検討している。

(館長)

→空穂記念館の観覧料は。(委員)

→将来的には無料化を図り、無料化のメリットで更なる利用促進を図りたい。(館長)

→先の話ということか。(委員)

→最短で来春。周知期間を含めれば、もう少し先になるかと思う。(館長)

(2) 収蔵資料公開展について

企画展・公開展は、今年は開催しないということか。(委員)

→現状、休止として状況を確認したい。職員減で準備などに必要な職員の日数が足りない。この点がクリアになり、開催できる状況になれば検討していきたいが、現状、休止せざるを得ない。(分館長)

→通常、美術館もそうであるが、常設展と企画展があり、企画展で人を集める。何もやらないと来館者が減るのではないかと不安である。(委員)

→常設展内での企画展示部門を工夫したいと、構想を練っている。(分館長)

→この状態で博物館の引継ぎを受けたが、空穂記念館に限らず、他の分館でも同じ話がある。今年は様子、状況をまず見たい。館の運営と人員といった行政改革は相反するところもある。今年の体制の方針が示されたなかで、分館毎に工夫して運営してほしい。今年の入館者の様子、状況を見て、今後の博物館全体の姿勢、方針を探していきたい。(館長)

→美術館に比べて、文学館の運営はどこでも大変。山梨県は文学館と美術館が併設されている。毎年小さな企画展をし、2～3年で大きな企画展を開催している。できる範囲で、小さな企画展でよいので開催して欲しい。(委員)

→令和4年の2回目の運営委員会の議事録を松本市のホームページで読んだ。上條前委員長は記念館には二つの要素があるとおっしゃっていた。歌人空穂についての資料収集、調査や研究と広くそれを紹介すること。空穂を拠り所として、地域の文化形成の拠点とすること。この二つを願ってやってきたと言われていた。企画展について考えると、過去のことを語りっぱなしにするだけでは先細りになる。新しい視点で空穂とその周辺を繰り返し提示していく企画展がないことには文学館は成り立たない。今は市の博物館体制の変革期だと思うが、縮小でなく、限られた人員と予算で、企画をしていく力、企画力をどのように作っていくかが課題。本館に集約される学芸員が空穂記念館の企画にどうやって関わっていくのか。小さな企画展示を行うとしても、市として、まるごと博物館を謳うのであれば、博物館本館として関わり合いの内容を今

年は真剣に考えていかないと。(委員長)

→本館の学芸員には分館の担当を割り振っている。企画展示や資料収集について、分館から相談があれば協力、支援する体制である。(館長)

→常設展内で展示替えの工夫といった企画展示は今年度でもできるということか。

(委員長)

→分館の企画で、本館の支援が必要であれば、相談にのり、支援していく。(館長)

→二人の委員(委員、委員)の意見のように、企画展示の積み重ねで文学館、分館は機能を維持できるという視点を大事にしていきたい。(委員長)

→大きな企画展は出来ないと言うのなら、せめて展示替えした図録の発行はできるのか。(委員)

→図録は確約できない。新博物館も紙ベースのものは作らない。本館もずっと収蔵品の図録を発行してきたが、今回は作らない。インターネットが発達している現在、紙ベースのものを発行するのは難しい。開館以来、常設展が変わっていないのは問題だと思っている。今後、常設展をどうするか、固定してきたものを新鮮なものに変えていくにはどうすれば良いのか、この1年考えていきたい。(補佐)

→武川(忠一)先生は記念館に来れば空穂の全てが解るようにしたいと言っていた。その想いを考えると残念だ。(委員)

(3) 冬季文化講座「冬日ざし」

冬日ざしは回数を減らさなくても、できるのではないか。冬日ざしの開催は、企画展や図録発行よりは簡易だと思う。(委員)

→仕事、行事は引き継いでいくと、4回開催すること、内容ではなく回数が目標となってしまう。博物館全体の事業見直しを行ったが、回数だけでなく、内容を一考していただきたい。(補佐)

(4) 博物館協議会

博物館協議会とはどのような構成か、市の位置づけは。空穂記念館の思いを博物館協議会に反映させる手立てはあるのか。運営委員会では計画書はあるけど予算書は付いていない。予算に関する場ではないから、予算に関することを要望するなら市しかない。(委員長)

→博物館協議会は市全体の諮問機関。空穂記念館の思いを反映させる場という意味では、本館の職員が出席しているこの運営委員会になる。(館長)

→本運営委員会での要望は誰に報告されるのか。(委員長)

→話し合った内容を空穂記念館の今後の活動に活かすということ。(補佐)

→その活かす主体は誰なのか。(委員長)

→全体的な方向性の決定、事業企画は分館、本館が主体となる。予算を伴った判断は最終的には市長とそれを承認する議会ということになる。予算が必要なものは本館から議会に諮ることになる。(館長)

(5) 令和5年度事業計画

今年度、冬季文化講座「冬日ざし」は1回～2回と縮小されている、企画展もそうだが、縮小方針はどこからでたのか。(委員)

→決定責任者は博物館長。縮小の根拠は予算の問題なのか。冬日ざしは、予算から1～2回までできるが、自分たちで主体的に、講師が手弁当で4回やるといったらできるのか。(委員長)

→手弁当で行うことは可能だと思う。(補佐)

→事業をやってはいけないことではない。謝礼は減らした。前館長の思いもあり、回数でなく質を高めるということで再検討して付いた予算(館長)

→内容で検討を、という趣旨はわかるが、今回は内容を吟味して予算で減らしたわけではない、ということですね。内容的に吟味して減らすべきというなら、市の言う内容の基準を提示してくれればそれに沿った内容を考える。それを無しに減らされると、今までの講座の内容がいかげなものだったのかと感じられる。例えば手弁当で講座を開催して内容が評価されれば、来年の予算に4回分つくことはありえるのか。

(委員長)

→減った予算を増やすことは難しい。むしろ別の事業や企画のほうが予算は付きやすい。ただ、全体的な経費の中で、スクラップアンドビルドと言われるが、優先度合は常に厳しく求められる。(館長)

→16分館の個性を生かす指導をしていかないと博物館行政は大きく後退していきかねない。(委員長)

→博物館全体の縮小ではない。館の特性に応じた予算のメリハリをつけるということ。松本まるごと博物館構想の中で、新本館の開館を中心に全体的な博物館構想を前に進めて行きたい。(館長)

→空穂記念館は空穂会はじめ、学校関係者など、様々な関与があって成り立っている博物館。熱い思いを削ぐような形で集約・統合されることが無いように願っている。市は本館と分館の内容を常にコラボしていくかモチベーションを高めるように協力していただきたい。(委員長)

→和田公民館としては記念館と共催をしていく方針。予算上の問題ばかりでなく、企画にあたり、記念館の人的要因が多いのではないか。冬日ざしに限らず、記念館の利用者を増やしていきたい。和田公民館は図書館が狭く子どもの利用がほとんどない。記念館館長と相談しているが、記念館に子ども向けの新刊を置きたい。小中学校の通学路沿いであり、立ち寄って欲しいと思うが、人的部分が心配で検討中。高綱中学校で生徒が地域でボランティアをする活動がある。その辺と結び付けられないか、和田公民館としても空穂記念館の運営には関わって行きたい。(副委員長)

→行政がまちおこしに短歌を使うことがある。地元から出た知名度の高い歌人を使うまちおこしがある。昨年、私が関わった中に、新潟県魚沼市の堀之内に宮終二記念館があり、毎年、短歌大会を開催している。1万3千首集まった。松本は窪田空穂の出身地であるのにもったいない。空穂の名前をもっと活用しては。短歌講座講師の4人

をもっと活用すればよい。資料に「空穂会との連携」とあるが、企画展など役に立てることがあればどんどん言って欲しい。(委員)

→幼稚園でも子育て短歌というものがある。(委員長)

→本館1階のウインドウギャラリーは通行人から見える展示スペースがある。館内は会議室や120人収容できる講堂など、展示機能は旧館を上回る。本館ギャラリーを活用して分館展示を行いながら分館へも促す。本館を活用しながら分館の周知をして促していくことは考えられる。本館と分館の連携も考えられる。そういった企画を学芸員に指示している。分館で行っていた企画を出張で、本館で行う。人の集まりは本館の方がいい。連携を今後考えて行く。そういった企画が分館側から出て来ることも期待している。本館を使っただけの講座、講演も可能であり、そういった形で活用することも考えている。(館長)

→松本は学生が多いが、大学生にとってはアクセスが課題。可能であれば、本館をスタートして分館を周るようなバスルートがあればありがたい。学生にとっては入館料より交通、アクセスの方が課題(委員)

→学生の記念館清掃など、ボランティアに感心している。お茶会で協力したい。七夕開催の7月から8月の2ヶ月の間で、7月16日であればお茶会ができる。10月7日の本館の開館に合わせて、空穂生家でお茶会を開催したい。(委員)

→空穂のことを知らない人も多い。今年は校長講話でも取り上げたい。芝沢小学校児童にとって空穂記念館は大事なもの。子どもに関する行事も多くてありがたいが、今年の記念館囲碁教室は芝沢小学校運動会の日。囲碁、将棋、百人一首に興味のある子どもたちも多い。講師の都合もあると思うが、学校と連携をしながら、日程合わせを事前に行っていきたい。(委員)